

# 長崎大学留学生センターにおける日本語補講コース (日本語一般プログラム) の変遷

永井智香子\*・松本久美子\*\*

キーワード：留学生センター日本語科目、一般プログラム、乗り入れ

## 1. はじめに

長崎大学留学生センターは1996年5月に省令化施設として設置されてから約12年が経過した。設置当初のセンターの日本語コースは研修コースと補講コースと全学教育の日本語のみであったが、その後、新しいプログラムが次々と立ち上がった。そういう状況の中、この12年の間に一番大きく変化の波の影響を受けたのは現在一般プログラムと呼ばれている補講コースである。センター開設当初は研修コース（現在の集中プログラム）が中心的な役割を果たしていたが、現在は一般プログラムがセンター日本語教育の中心的な機能を果たすプログラムとなっている。

現在、当センターが運営する日本語教育プログラムは、集中プログラム、一般プログラム、長崎大学短期留学プログラム（NISP）、留学生センター交換留学生プログラム（NUJALP）、長崎大学留学生センター上級日本語・日本文化コース（AJLC）の5つである。これらのプログラムの日本語科目の多くが一般プログラムと乗り入れている。

昨年度の紀要では研修コース（現在の集中プログラム）の変遷を中心に日本語プログラムの変化を追ったが、本稿では、補講コース（現在の一般プログラム）に焦点を当て、留学生センターで開講する日本語プログラムの変遷を見ていくこととする。

## 2. 補講コース概要

補講コースは留学生センター設置以前から開講されていたコースを引き継いだもので、大学院生、研究生を対象としていた。学部留学生の日本語教育は当時の教養部で行われていた。<sup>i</sup>

このコースは、大学院生、研究生の留学生活に必要な日本語力を養成することを本来の目的としている。2001年度前期から、コースの特色と実態を明確にするため、補講コースは一般コースに名称を改めた。また、その3年後の2004度から新しいプログラムの開設にともなって一般プログラムと呼ばれるようになった。

### 3. "補講コース"の変化について

補講コースの変化について、①センター発足以前、②センター発足後：補講コースが他のプログラムと乗り入れず、独立して走っていた期間（1996年10月から2004年3月まで）③他のプログラムとの乗り入れ後（2004年4月～2007年3月まで）の大きく3つの時期に分けてまとめてみた。

#### 3-1 留学生センター発足以前の長崎大学における日本語教育

1994年3月に発行された『長崎大学留学生指導センター年報』第1号に「留学生センター日本語コースの現状と課題」(志柿光浩著)という現状報告が掲載されている。ここではそれを参考に以下にまとめた。

長崎大学留学生センターは省令施設として1996年5月に設置された。長崎大学留学生センターの前身は長崎大学外国人指導センターで、1986年6月に発足した。発足当時開講されていたのは日本語補講のみであった。当時は学生部などの主催で教養部の日本語・日本事情担当の教員を中心に課外補講が教えられていた。その後補講の受講希望者は増え続け、日本語・日本事情担当教員で対応するのが難しくなり、1989年2月に学内措置で専任教員が配置された。課外補講の受講を希望する留学生の増加に伴い、日本語教育専用の教室も必要になった。センター専用施設が学内に確保できたのは1989年8月のことであった。外国人指導センター発足当時開講されていた日本語クラスは初級と中級のみであった。

長崎大学外国人指導センター発足の翌年、1990年からセンターで開講される日本語クラスに課外補講という名称がつけられた。

外国人留学生指導センターが発足した背景には留学生の急増がある。指導センター発足前の1987年には76名だった留学生は5年後の1992年には約2倍の138名に達している。さらに1994年1月には175名、1996年2月には237名となっている。

### 3-2 センター発足後：補講コースが他のプログラムと乗り入れず、独立して走っていた期間（1996年10月から2004年3月まで）

この時期は留学生センターにおける日本語教育が「補講コース」と「研修コース」の2本立てだった時期で、補講コースの科目と研修コースの科目が相互に乗り入れることなく、開講されていた。ここでは4つの時期にわけてまとめた。

#### 3-2-1 1996年度後期の補講コース

表Iはセンター発足に合わせて開講された補講コースの時間割である。

太枠で囲まれた生活日本語A、生活日本語Bというクラスはどちらもゼロ初級のクラスで、テキストはJICAの『技術研修のための日本語』の第1巻と2巻が使われていた。このテキストは第2巻までで初級が終了する。

この当時補講コースの1学期は14週間で、Aクラスは7週間で

表1 1996年度後期 日本語コース（生活日本語）時間割表

	月	火	水	木	金
8:50~ 10:20	生活 日本語 A-1	生活 日本語 A-3		生活 日本語 B-1	生活 日本語 B-3
10:30 ~ 12:00	生活 日本語 A-2	生活 日本語 A-4		生活 日本語 B-2	生活 日本語 B-4
12:50 ~ 14:20	会話A	作文I	会話B	日本の 社会 と文化 B	作文II
14:30 ~ 16:00	実践 日本語 I	漢字A	実践 日本語 II	漢字B	日本の 社会 と文化 A

1クールとし前述のテキストの第1巻を2回繰り返すクラスであった。Bクラスは第2巻まで（初級）を終了するクラスであった。当時は学期の途中に来日する学生で日本語の学習経験のない者が多かったため、それらの学生に配慮したクラスが必要であった。「会話A」「漢字A」「日本の社会と文化A」などAのつくものはAクラスのレベルのもので、「会話B」「漢字B」「日本の社会と文化B」などBのつくものはBクラスのレベルに準じて教えられていた。

A, Bがつかない「作文Ⅰ」「作文Ⅱ」「実践日本語Ⅰ」「実践日本語Ⅱ」クラスは中級前半までをカバーしていた。つまり、当時、中級後半、及び上級レベルの日本語補講クラスは開講されていなかったことになる。

当時、専任教員は補講コースの改善の必要性を感じていた。センターで半期に開設する日本語教育に関する科目(研修コースの芸術及びスポーツを除く。)のコマ数は、課外補講分18コマ、研修コース分32コマの計50コマ、時間数にして1400時間で、初級から上級までを視野においた科目開設の必要性について話し合いが持たれていた。さらに、当時から今後、研修コース受講者の減少が予想される中で、各受講者の日本語の能力差への対応と補講コース受講者の幅広いニーズへの対応などを解決する手段として、研修コースと補講コースの相互乗り入れの検討が行われていた。<sup>ii</sup>

### 3-2-2 1997年前期から2000年後期までの補講コース

1997年前期からの補講コースのカリキュラム改正のために何度も専任教員で話し合いが持たれ、その結果、補講コースは初級から上級まで週に20コマ開講されることになった。科目名を初級からあげていくと「初級Ⅰ(週3コマ)」「初級Ⅱ(週3コマ)」「初級漢字Ⅰ」「初級漢字Ⅱ」「初中級会話」「初中級読解」「中級Ⅰ会話」「中級Ⅰ読解」「中級Ⅰ聴解」「中級Ⅱ読解」「中級Ⅱ聴解」「中級Ⅱ会話」「中級作文」「上級読解(会話)」「上級聴解」「上級作文」となる。科目数に多少の違いはあるが、「上級聴解」と「上級作文」以外は2008年前期現在も一般プログラムとして開講されている。

1998年度は1997年度と同様に補講クラスは20コマ開講された。1999年度、2000年度は開講コマ数が3コマ減って17コマになった。その理由は新しく研修コースCクラス(中級レベル8コマ)が開講されたことと、後期に日韓共同理工系学部留学生プログラム生のためのクラス(1コマ)が開かれたことがあげられる。その翌年の2001年度の補講コースは2コマ増加しているが、大きい変化はない。

### 3-2-3 2001年前期から2002年後期まで

2001年度前期より呼称が変わった。それまでの「補講コース」から「一般コース」と呼ばれるようになった。2001年度の一般コースのコマ数は19コマと前年に比べて2コマ増えているが大きい変化はない。コマ数に大きい変化

があったのは2002年度である。2002年度の前期より研修コースCクラス（中級前半レベル、全8コマ）がなくなり、一般コースの科目は前年度の19コマより7コマ増えて26コマ開かれるようになった。これは主に中級前半レベルのクラスを増やしたからである。前年度である2001年度の中級前半レベルの補講コースのクラスは「中級Ⅰ」が2コマと「中級Ⅰ聴解会話」が1コマの計3コマだけであった。2002年度の一般コースの中級前半レベルのクラスは「中級Ⅰa」が週に4コマ、「中級Ⅰb」が週に2コマ、「中級漢字」が1コマ、「中級作文」が1コマ、「中級Ⅰ聴解会話」が1コマと9コマとなっている。

### 3-2-4 2003年度

2003年度の集中コースは初級レベル（Aコース）と中級レベル（Bコース全8コマ）の2コースになった。Bコースは2002年度の一般コースのクラスとして開講されていた「中級Ⅰa」4コマと「中級Ⅰb」2コマと「中級漢字」1コマと「中級作文」1コマの計8コマからなっていた。ただし、集中Bコースを形成している4つの科目はそれぞれ一般コースの科目としても開講されていた。つまり、この年度から事実上、集中コースと一般コースの乗り入れが始まったと言える。この年の一般コースのコマ数は集中Bコースとの乗り入れ科目を含めて全部で27コマであった。

### 3-3 他のプログラムとの乗り入れ後（2004年4月～2007年3月まで）

#### 3-3-1 2004年度春学期

2004年度から一般コースは現在の呼称である一般プログラムに名称変更された。これは、同年度秋学期より長崎大学短期留学プログラム（NISPP）と留学生センター交換留学生プログラム（NUJALP）が開始されることにともなって行われたものである。

2004年度前期から再び集中プログラムはAコース、Bコース、Cコースの3コースになったが、Cコースは2003年度の集中Bコースと内容もコマ数も同じ中級レベルで、一般プログラムとの乗り入れが行われていた。集中Bコースは一般プログラムの「初級Ⅱ」クラスをそれまでの週3コマから週5コマに増やして乗り入れが始まった。このときから集中プログラムで一般プログラムとの乗り入れが行われていないのはゼロ初級のクラス、集中Aコースのみとなった。2004年度の一般プログラムのコマ数は30コマになった。その増加の理

由としては主に中級レベルの日本語を学ぶ留学生センター交換留学生プログラム (NUJALP) の開始が予定されていたことにある。

### 3-3-2 2004年秋学期から2005年春学期まで

2004年秋学期より長崎大学短期留学プログラム (NISP) と留学生センター交換留学生プログラム (NUJALP) が開始された。(以下、それぞれNISPとNUJALPと呼ぶ。) NISPおよびNUJALPは1年間のプログラムである。受け入れは秋学期(10月)のみで、春学期(4月)の受け入れはない。

NISPは長崎大学の協定校を対象とした交換留学プログラムで、日本語科目と英語による講義科目で構成されている。参加学生に求められるのは英語能力であり、日本語能力は問われない。これに対して、NUJALPは、協定校を対象としているのはNISPと同様だが、協定校で日本語・日本文化を専攻している学生(3年次生)のみを対象としており、このプログラムの学生は日本語の上達を主たる目的として来日する。

NISPのプログラム用に新設された日本語科目は、「初級日本語1」が5コマ、「初級日本語2」が5コマの合わせて10コマで、中級レベル以上の日本語科目は主として一般プログラムと乗り入れることとなった。NUJALP用に新設された科目は、「日本語特別講義<sup>ii</sup>」と「日本の伝統文化」の2コマでこれら2科目以外の科目は一般プログラムの日本語中級以上の科目全てと乗り入れている。

これで一般プログラムと乗り入れているプログラムは、2003年度に既に乗り入れが開始されている集中プログラムの中級既習者コース(集中Cコース)、に合わせて、初級既習者コース(集中Bコース)、NISP、NUJALPの3つとなった。つまり、2004年秋学期より一般プログラムの日本語クラスの中には大学院生、大学院の研究生、集中プログラムの既習者クラスの学生、NISPの学生(日本語中級レベル)、NUJALPの学生(日本語中級から上級レベル)、留学生の配偶者が混在するクラスが多く出現することになった。

なお、上級レベルについてであるが、NISPは学部の正規生の日本語クラスである全学教育科目「日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」(上級レベル)と乗り入れており、NUJALPは一般プログラムの「上級」に加え、全学教育科目「日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」にも乗り入れている。

### 3-4 2005年度秋学期から2007年度秋学期まで

2005年度春学期からはNISPとNUJALPそれぞれについてプログラムの変化を見ていくこととする。

#### 3-4-1 NISPと一般プログラムの乗り入れ

学生からの要望で、2006年度春学期からNISPの日本語科目として新たに「初級漢字Ⅰ」（集中プログラムと一般プログラムの乗り入れ科目）が提供されるようになった。また、2006年度秋学期からは「初級漢字Ⅰ」に続いて「初級漢字Ⅱ」（集中プログラムと一般プログラムの乗り入れ科目）もNISPの日本語科目に加えられた。しかし「初級漢字Ⅰ」では一クラスの人数が予想以上に多くなったため、翌年の2007年度秋学期から、秋学期のみNISP専用の「漢字Ⅰ」を設けることとした。つまり、「初級漢字Ⅱ」は春・秋学期とも3つのプログラム（集中プログラム、一般プログラム、NISP）の乗り入れ科目であるが、「初級漢字Ⅰ」は、春学期は集中プログラムと一般プログラムの乗り入れ科目で、秋学期は集中プログラム、一般プログラム、NISPの乗り入れ科目ということになる。

2004年度秋学期から2007年度秋学期までのNISPの一般プログラムとの乗り入れ科目は、「日本語3」（中級前半レベル）は読解2コマ（一般プログラムの「中級Ⅰ読解」）、発表2コマ（一般プログラムの「中級Ⅰ発表・作文」）の計4コマで、「日本語4」（中級後半レベル）は読解2コマ（一般プログラムの「中級Ⅱ読解a」）、聴解1コマ（一般プログラムの「中級Ⅱ聴解」）の計3コマであった。

2007年度後期からは、NISPの「日本語3」は読解2コマ（一般プログラムの「中級Ⅰ読解」）、聴解1コマ（一般プログラムの「中級Ⅰ読解」）、作文1コマ（一般プログラムの「中級Ⅰ作文」）の計4コマでコマ数の変化はないが、「日本語4」については作文1コマ（一般プログラムの「中級Ⅱ作文」）が加えられて、読解2コマ、聴解1コマ、作文1コマの計4コマとなった。

#### 3-4-2 NUJALPと一般プログラムの乗り入れとNAJLCの開設

NUJALPの日本語科目は開設当初から一般プログラムの中の初級レベルを除く全ての科目と乗り入れている。

2007年度秋学期から中国の協定校の要望に応える形で、「長崎大学留学生センター上級日本語・日本文化コース」(NAJLC)が開始された。<sup>v</sup> このコースを開始するに当たり、一般プログラムの中に新たに上級レベルのクラス(一般プログラムの上級)を2コマ開講することになったが、同時にこの2コマをNUJALPの科目としても提供することとした。よって、2007年度秋学期から、NUJALPは一般プログラムの中の初級を除く全ての科目(準中級から上級:15科目、23コマ)に乗り入れていることになる。(表2参照)

#### 4. 乗り入れによる問題点

留学生センター開設当初、学部の正規留学生を対象とした日本語科目に加え、センターが運営する日本語コースは、日本語研修コースと大学院生・研究生を対象とした補講コースの2つしかなかった。しかし、2004年度秋学期から集中プログラム(もとの研修コース)、一般プログラム(もとの補講コース)に加えて、長崎大学短期留学プログラム(NISP)、留学生センター交換留学生プログラム(NUJALP)が新設され、2007年度秋学期からは長崎大学留学生センター上級日本語・日本文化コース(NAJLC)が始まったことによって、中級以上のレベルでは一つのクラスにさまざまなプログラムの学生が混在するケースが多くなった。その結果、日本語科目の単位を必要とする受講生とそうでない受講生が混在するクラスが増えており、教員側もクラス運営等について苦慮するケースが増えている。

複数のプログラムが一般プログラムに乗り入れるようになったことによる問題点として、まず、プログラムの開始時期の違いがあげられる。一般プログラムの年度開始時期は春学期(4月)であるが、NISP、NUJALP、AJLCの各プログラムの年度開始は秋学期(10月)である。留学生センターでは4月から新年度の時間割をその前年の秋に決める。乗り入れが始まる前は一般プログラムの年度に合わせて4月から翌年の3月までの時間割りを決定すればよかったが、乗り入れ後はNISPの年度終わりである翌年の9月までの時間割りを考える必要が出てきた。しかし、1年半分、つまり、年度をまたいだ時間割りを組むのは現状ではかなり難しい。また、開講科目変更についても乗り入れ開始以前は半期ごとに検討が可能であったが、複数のプログラムとの乗り入れ後は、一般プログラムの開始時期である4月からNISPの年度が終了する翌年の9月までの1年半の間、開講科目の変更ができなくなった。



前年度の紀要でも述べたが、近年、長崎大学の学部にも所属する協定校からの1年間（もしくは半年）の交換留学生が増加している。この学部所属の交換留学生の中で、学部の正規留学生の日本語科目だけでなく、留学生センターの一般プログラムの受講を希望するものが多い。しかし、これらの学生に対して、現況のシステムでは、学部正規留学生の日本語科目は単位として認定されるが、センターの一般プログラムについては受講証明の発行のみで単位の認定はできない。NISPの中級以上の日本語科目は一般プログラムの日本語科目と乗り入れており、同じ科目を受講しているにもかかわらず、NISPの学生にとってはその科目は単位認定科目となり、学部の交換留学生にとっては受講証明のみしかもらえないというような状況が生じてしまっている。

## 5. 今後の課題

センター開設当初の1996年の長崎大学の留学生総数は200名ほどであったが、現在では360名ほどになっている。長崎大学の中期目標等を見ると、今後も留学生の受入数を増やしていくことが大学の方針として挙げられており、今後も更に受け入れ留学生数は増加していくと考えられる。

センターのかかわる日本語プログラムの中で唯一乗り入れがされていないのは集中プログラムのAコースであるが、2008年度後期から一般プログラム（初級I）との乗り入れを検討中である。その際にはすべてのプログラムを見渡した大規模なカリキュラム編成の見直しが必要とされる。受け入れ留学生はますます多様化しており、今後の留学生数の変動、協定校からの要望、学内のニーズ等、さまざまな観点から検討を加え、全体のカリキュラムを考えていかなければならないであろう。また、上記で述べた乗り入れによる問題点についても、早急に何らかの対策を講じていく必要があり、カリキュラム編成の見直しと並んで、留学生センターの2008年度の最重要課題の一つである。

## 【註】

- i 教養部は1997年になくなり、それ以降全学教育科目の留学生用科目として開講されている。
- ii 1996年11月27日のセンター会議の議事録を参照した。
- iii 2004年秋のプログラム開始から現在までのところ、このプログラムに参加している協定校はオランダのライデン大学で、毎年日本語学科の学生10名が参加してきている。
- iv 2005年度後期から、「日本語特別講義」(1コマ)に代わって「日本語演習Ⅰ」及び「日本語演習Ⅱ」(それぞれ1コマずつ)を開講した。
- v このコースは長崎大学の協定校で日本語・日本文化を専攻している学生で日本語が上級レベルの学生を対象にしている。このコースの学生は交換留学生としてではなく授業料を支払って留学生センターの日本語クラスを受講する。

## 〈参考文献〉

- 1) 松本久美子・永井智香子(2007)「長崎大学留学生センターにおける日本語教育の10年を振り返って」『長崎大学留学生センター紀要』第15号
- 2) 志柿光浩(1994)「留学生センター日本語コースの現状と課題」『長崎大学留学生指導センター年報』第1号

( \*留学センター准教授、\*\* 同准教授)

表2 一般プログラムの乗り入れ一覧 (2007年度)

レベル	一般プログラム 全科目 (括弧内は過当たりの コマ数)	留学生センター 交換留学生プロ グラム (NUJALP)	長崎大学短 期留学プロ グラム (NISP)	長崎大学留 学生センタ ー上級日本 語・日本文 化コース (AJLC)	集中プロ グラム
初級前半	初級Ⅰ (4)				
	初級Ⅰ漢字 (1)		初級Ⅰ漢字		A コース の漢字
初級後半	初級Ⅱ (5)				B コース の初級文 型
	初級Ⅱ漢字 (1)		初級Ⅱ漢字		B コース の漢字
準中級	準中級 (2)	準中級			
中級前半	中級Ⅰ読解 (2)	中級Ⅰ読解	日本語3		
	中級Ⅰ会話 (2)	中級Ⅰ会話			
	中級Ⅰ作文 (1)	中級Ⅰ作文	日本語3		
	中級Ⅰ聴解 (1)	中級Ⅰ聴解	日本語3		
	中級漢字 (1)	中級漢字	中級漢字		
中級後半	中級Ⅱ読解 a(2)	中級Ⅱ読解 a	日本語4		
	中級Ⅱ読解 b(2)※	中級Ⅱ読解 b			
	中級Ⅱ会話 (2)	中級Ⅱ会話			
	中級Ⅱ作文	中級Ⅱ作文	日本語4		
	中級Ⅱ聴解	中級Ⅱ聴解	日本語4		
準上級	準上級会話	準上級会話			
	準上級読解	準上級読解			
上級	日本事情演習Ⅰ	日本事情演習Ⅰ ※	日本語5E ※	日本事情演習 A 日本事情演習 C※	
	日本事情演習Ⅱ	日本事情演習Ⅱ ※	日本語5F ※	日本事情演習 B 日本事情演習 D※	

※春学期のみ履修